記紀歌謡から見た『古事記』と『日本書紀』(一)

岡田喜久男

一

『古事記』と『日本書紀』は、殆んど同時期に成立しているにもかかわらず、その性格を大いに異にしていることがよく知られている。

『古事記』の成立は、その序文の末尾に「和銅五年正月二十八日」とあり、『日本書紀』は、『続日本紀』の養老四年五月癸酉の条に、「先レ是一品舎人親王奉レ勅修二日本紀一。至レ是功成奏上。紀三十巻系図一巻」とあるのが成立の時であることが明瞭であるから、和銅五年（七一二）から養老四年（七二〇）までの僅か八年の差で両書は成立したことになる。八年という期間が、今日的感覚で捕えて良いとは思えないが、両書が全く無関係に成立したとは考え難いことも確かである。

ところが、坂本太郎氏が

古事記は序文によれば天武天皇の勅語に始まり、元明天皇の紹述によって完成した勅撰の書であって、朝野共に重んずべき書物である。しかるにそれは古い時代を通じて重んぜられず、書紀さえそれを明記して引用することをしないのである。書紀の撰者は引用書を挙げることは比較的厳密で、――中略――高麗沙門道顕日本世紀のような個人の史書、さては百済記、百済本記の類をいずれも書名を明記して引用することを厭わないにもかかわらず、最も近く撰修せられて、最も内容的に深い関連のある古事記については固く口を緘して語らず、全篇一度もその名を示していないのは、普通の状態とは考えられないのである。両者の間には何か正常でない、一が他を無視するような原因が伏在するのではあるまいか。……（『日本古代史の基礎的研究 上 文献篇』二三頁）

と言われるように、両書が関係あると明確には論証できないし、むしろ意図的に無関係であろうとした形跡が見られるのである。

また、西郷信綱氏と倉塚曄子氏は対談（「国文学」S59・9）「古事記のよみをどう転換させるか」）の中で

倉塚　…同時に、古事記と日本書紀は、よく記紀と称して、ひっくるめて呼ばれることが今まで圧倒的に多かったわけですが、そのようにひっくるめてはとても呼べない、非常に深い文化的、精神的深淵がこの二つの間には横たわっているような気がする。…

西郷　そうですね、いつも記紀というふうにおみき徳利みたいに並べて扱われているけど、古事記と日本書紀の間には、何かが起こっているんです。しかもかなり決定的な何かが。それは、文学史でいえば人麻呂と憶良の間に何かが起こっているのと重なるでしょうし、あるいは奈良に都城ができたということと、その前の時代との違いなどとも関連しているでしょうし、あるいは律令というものが作られたことと、そういうものがなかった時代との違いも複雑にからみ合っている、そういう何かが起きている。

と述べている。

勿論、『古事記』が『日本書紀』に言及しないのは、成立年代の古い方が、未完の書を無視したと言えようが、その逆は、厖大な資料を駆使した大部の書である『日本書紀』であってみれば、成り立たないように思われる。

例えば、やや時代は下るが、『万葉集』でさえも、歌の左注や題詞に、『古事記』が三回（90番歌の題詞と左注、3263番歌の左注）『日本書紀』が、「紀」（15番歌左注他）「日本紀」（24番歌左注他）「日本書紀」（6番歌左注他）等十回以上登場し、90番歌では記紀が同時に引用されているほどである。

『古事記』と『日本書紀』の関係についての疑問は、神話や説話の比較、語彙の関連などによって解決されるとの考えから、従来研究が進められ成果が挙っている。それは『日本書紀』の巻一・巻二に収められている神話部分に異伝が多く、『古事記』上巻と重なる話が載せられていること、倭建命伝説をはじめとして記紀両書に共通伝説があり、その差異が本質的であること、同時代の記述にしては語彙用字法に違いが大きいことなどが研究の立脚点であったように思う。右のようなことから言えば、記紀歌謡に関しても、比較研究することで両書の性質を明瞭にすることが出来る筈である。

記紀の文学性と大きな関連を持つ歌謡は従来、『古事記』に百十二首、『日本書紀』に百二十八首の計二百四十首あり、記紀歌謡と呼ばれ、古代歌謡の中心をなすが、記紀に共通の歌謡が約五十首あるので、約百九十首を記紀歌謡と呼んで一括して取り扱っている。

本稿では、従来散文部分で行われていた記紀の比較を、歌謡、特に類同歌謡と呼ばれるものを中心に厳密に比較検討して、記紀両書の関係を明らかにしたいと思う。

二

最初に、記紀歌謡を歌謡番号（日本古典文学大系本『古代歌謡集』の番号により、算用数字を『古事記』、漢数字を『日本書紀』の歌謡番号とする）順に並べ、類同歌の対応関係を明らかにしたい。

次の表(一)は、『古事記』の歌謡を基本に、『日本書紀』の類同歌を対応させたものであるが、中間の欄の「＝」の記号は、両書の歌謡が語句・形式で完全に一致していることを示すものである。

表(一)により、以下比較する歌謡は、『古事記』を中心にすれば五十三首であることが明らかになった。

次にその五十三首の類同歌を(イ)作者、(ロ)歌詞の相違、(ハ)形式の三点において対応させ、表にまとめてみる。（異伝は歌詞のところにのみ示した）

表(一) 記紀類同歌謡

紀		記	紀		記	紀		記	紀		記	紀		記
		93	六一		70			47			24	一		1
		94	六二		71	三九		48	二五	=	25			2
		95	六三		72			49	二六	=	26			3
		96			73	四二		50			27			4
七五		97	四一	=	74	四三		51			28			5
七六		98			75			52	二七		29	二		6
		99			76			53	二二		30	六		7
		100	六四	=	77			54	二三		31	五		8
		101	六九		78			55	二一		32	七		9
		102			79			56			33	九		10
		103			80	五三		57			34	十三		11
		104	七二		81	五四		58			35	十四		12
		105	七三	=	82	五二		59			36	八		13
		106	七一		83			60			37	十二		14
		107			84	五八	=	61	二九		38			15
八七	=	108			85	五五		62	三二		39			16
		109	七十		86	五七	=	63	三三		40			17
		110			87			64	三四	=	41			18
八五		111			88			65			42			19
八六	=	112			89	五九		66	三五		43			20
					90	五九		67	三六		44			21
					91	六十		68	三七		45	十八		22
					92			69	三八		46	二十		23

表(二)

番号	古事記歌謡	番号	日本書紀歌謡
1	(イ) 須佐之男の命 (ロ) 妻ごみに（第三句・他動詞上二段連用形） (ハ) 五七五七七	一	(イ) 同上 (ロ) 妻ごめに（第三句・他動詞下二段連用形） (ハ) 同上
6	(イ) 阿治志貴高日子根の神 (ロ) 天なるや　弟棚機の　項がせる　玉の御統に　御統に　穴玉はや　み谷　ニ渡らす　阿治志貴　高日子根　の神そ (ハ) 五七五七五六三六四九	二	(イ) 同上 (ロ) 天なるや　弟棚機の　項がせる　玉の御統の　穴玉はや　み谷　ニ渡らす　味耜高彦根 (ハ) 五七五八六三六九
7	(イ) 豊玉姫 (ロ) 赤玉は　緒さへ光れど　白玉の　君が装し　貴くありけり （対照的寄物陳思歌） (ハ) 五七五七八	六	(イ) 同上 (ロ) 赤玉の　光はありと　人は言へど　君が装し　貴くありけり (ハ) 五七六七八

――線部は相違部分　□内は他方に全くない部分

番号	古事記歌謡	番号	日本書紀歌謡
8	(イ) 日子遲（火遠理の命） (ロ) 沖つ鳥　鴨どく島に…　妹は忘れじ（下二段・未然形） 世のことごとに (ハ) 五七五七七	五	(イ) 同上 (ロ) 沖つ鳥　鴨づく島に…　妹は忘らじ（四段・未然形）世 のことごとも (ハ) 同上
9	(イ) 神武天皇 (ロ) 宇陀の　高城に…いすくはし　鯨障る…　こきだひゑね ええ　しやこしや　こはいのごふそ ああ　しやこしや　こは嘲笑そ (ハ) 三四六五七五六四五五六六五五五七六二五七二五八	七	(イ) 同上 (ロ) 宇陀の　高城に…いすくはし　鯨障り…　こきだひゑね (ハ) 三四六五七五六四五五六六五五五七六
10	(イ) 神武天皇 (ロ) 忍坂の　大室屋に…人多に　来入り居り　人多に　入り 居りとも　みつみつし　久米の子が　頭槌い　石椎いも ち　撃ちてし止まむ	九	(イ) 道臣の命 (ロ) 忍坂の　大室屋に…人多に　入り居りとも　人多に　来 入り居りとも　みつみつし　久米の子らが　頭槌い　石 椎いもち　撃ちてし止やむ

番号	古事記歌謡	番号	日本書紀歌謡
11	(イ) 神武天皇 (ロ) みつみつし　久米の子らが　粟生には　香韮一本（かみらひともと）　そね が本　其根芽つなぎて　撃ちてし止やむ (ハ) 五六五七五七七	十三	(イ) 同上 (ロ) みつみつし　久米の子らが　垣本に　粟生には　香韮一 本　そのが本　其根芽つなぎて　撃ちてし止まむ (ハ) 五六五五七五七七
	(ハ) 四六五五五六五五七七五六五七八 頭槌い　石椎いもち　今撃たば良らし		(ハ) 四六五六五七五六五七七
12	(イ) 神武天皇 (ロ) みつみつし　久米の子らが…口ひびく　我は忘れじ　撃 ちてし止まむ (ハ) 五六五七五七七	十四	(イ) 同上 (ロ) みつみつし　久米の子らが…口ひびく　我は忘れず　撃 ちてし止まむ (ハ) 同上
13	(イ) 神武天皇 (ロ) 神風の…這ひもとほろふ　しただみの　い這ひもとほり 撃ちてし止まむ	八	(イ) 同上 (ロ) 神風の…大石（おほいし）にや　い這ひもとほる　しただみの しただみの　吾子よ　吾子よ　しただみの　い這ひもと

番号	古事記歌謡	番号	日本書紀歌謡
	(ハ) 五六四七五七七		(ハ) 五六六七五五三三五七七七 ほり　撃ちてし止まむ　撃ちてし止まむ
14	(イ) 神武天皇 (ロ) 楯並めて　伊那佐の山の　木の間よも… (ハ) 五七五七五六五六七	十二	(イ) 同上 (ロ) 楯並めて　伊那佐の山の　木の間ゆも… (ハ) 同上
22	(イ) 腰裳着る少女 (ロ) 御真木入日子はや　御真木入日子はや　己が命を　盗み 死せむと　後つ戸よ　い行き違ひ　前つ戸よ　い行き違 ひ　窺はく　知らにと　御真木入日子はや (ハ) 九九五七五六五六五四九	十八	(イ) 少女 (ロ) 御間城入彦はや　己が命を　死せむと　ぬすまく知らに 姫遊びすも　一に云ふ　大き戸より　窺ひて　殺さむと すらくを知らに　姫遊びすも (ハ) 九五四七七
23	(イ) 倭建命 (ロ) やつめさす　出雲建が… (ハ) 五七五七七	二十	(イ) 時の人 (ロ) やくもたつ　出雲建が… (ハ) 五七五七七

番号	古事記歌謡	番号	日本書紀歌謡
25	(イ) 倭建命	二五	(イ) 同上
	(ロ) 新治　筑波を過ぎて　幾夜か寝つる		(ロ) 同上
	(ハ) 四七七		(ハ) 同上
26	(イ) 御火焼の老人⇩東の国造	二六	(イ) 秉燭者⇩敦く賞まれた
	(ロ) 日日並べて　夜には九夜　日には十日を		(ロ) 同上
	(ハ) 五七七		(ハ) 五七七
29	(イ) 倭建命	二七	(イ) 同上
	(ロ) 尾張に　直に向へる　尾津の崎なる　一つ松　あせを 一つ松　人にありせば　太刀佩けましを　衣着せましを		(ロ) 尾張に　直に向へる　一つ松　あはれ　一つ松　人にありせば　衣着せましを　太刀佩けましを
	(ハ) 四七七五三五七七七五三		(ハ) 四七五三五七七七
30	(イ) 倭建命	二二	(イ) 景行天皇

番号	古事記歌謡	番号	日本書紀歌謡
	(ロ) 大和は　国のま秀ろば　畳なづく　青垣　山ごもれる 大和しうるはし		(ロ) 大和は　国のま秀らま　畳なづく　青垣山　こもれる 大和としうるはし
	(ハ) 四七五四六八		(ハ) 四七五六四八
31	(イ) 倭建命	二三	(イ) 景行天皇
	(ロ) 命の　またけむ人は　畳薦　平群の山の　熊白樫が葉 を　髻華に挿せ　その子		(ロ) 命の　まそけむ人は畳薦　平群の山の　白檮が枝を　髻 華に挿せ　この子
	(ハ) 四七五七七五三		(ハ) 同上
32	(イ) 倭建命	二一	(イ) 景行天皇
	(ロ) はしけやし　我家への方よ　雲居立ち来む		(ロ) はしきよし　我家の方よ　雲居立ち来も
	(ハ) 五七七		(ハ) 同上
38	(イ) 忍熊の王	二九	(イ) 同上
	(ロ) いざ吾君　振熊が　痛手負はずは　鳰鳥の 淡海の海に　潜きせなわ		(ロ) いざ吾君　五十狭茅宿祢　たまきはる　内の朝臣が 頭椎の　痛手負はずは　鳰鳥の　潜きせな

番号	古事記歌謡	番号	日本書紀歌謡
	(ハ) 四五七五七六		(ハ) 四六五六五七五五
39	(イ) 神功皇后	三一	(イ) 同　上
	(ロ) この御酒は…神寿(かむほ)き　寿き狂ほし　豊寿き　寿き廻(もとほ)し…御酒ぞ		(ロ) この御酒は…豊寿き　寿廻(もとほ)し　神寿き　寿き狂ほし…御酒ぞ
	(ハ) 五七五七五七四六四六五三五二		(ハ) 同上
40	(イ) 建内の宿祢	三三	(イ) 同上
	(ロ) この御酒を…歌ひつつ　醸みけれかも　舞ひつつ　醸みけれかも　この御酒の　御酒の　あやにうた楽(だの)し　ささ		(ロ) この御酒を…歌ひつつ　醸みけめかも　この御酒の　あやにうた楽(だの)し　ささ
	(ハ) 五七五六五六四六五三八二		(ハ) 五七五六五六五八二
41	(イ) 応神天皇	三四	(イ) 同上
	(ロ) 千葉(ちば)の葛野(かつの)を見れば…		(ロ) 同上
	(ハ) 三七五六七		(ハ) 同上

番号	古事記歌謡	番号	日本書紀歌謡
43	(イ) 応神天皇 (ロ) いざ子ども 野蒜摘みに 蒜摘みに わが行く道の 香妙し 花橘は 上つ枝は 鳥居枯らし 下枝は 人取り 枯らし 三栗の 中つ枝の ほつもり 赤ら嬢子を 誘ささば 良らしな (ハ) 五六五七四七四六四七五五四七五四	三五	(イ) 同上 (ロ) いざ吾君 野に蒜摘みに 蒜摘みに わが行く道に 香妙し 花橘 下枝らは 人皆取り 上枝は 鳥居枯らし …ふほごもり 赤れる嬢子 いざさかば良な (ハ) 四七五七四六五六四六五五五七七
44	(イ) 応神天皇 (ロ) 水たまる 依網の池の 堰杙打ちが 刺しける知らに 蓴繰り 延へけく知らに わが心しぞ いや愚にして 今ぞ悔しき (ハ) 五七六七五七七七七	三六	(イ) 大鷦鷯の尊 (ロ) 水たまる 依網の池に 蓴繰り 延へけく知らに 堰杙築く 川俣江の 菱茎の 刺しけく知らに 吾が心し いや愚にして (ハ) 五七五七五六五七六七
45	(イ) 大雀の命 (ロ) 道の後 こはだ嬢子を 神の如 聞えしかども 相枕まく	三七	(イ) 同上 (ロ) 道の後 こはだ嬢子を 神の如 聞えしかど 相枕まく

番号	古事記歌謡
	(ハ) 五七五七七
46	(イ) 大雀の命
	(ロ) 道の後　こはだ嬢子は／争はず　寝しくをしぞも　愛し（うるは）／み思（おも）ふ
	(ハ) 五七五七八
48	(イ) 吉野の国主等
	(ロ) 白樫（かし）の生（ふ）に…／醸みし大御酒
	(ハ) 五七四七四七四
50	(イ) 大山守の命
	(ロ) ちはやぶる　宇治の渡りに…／
	(ハ) 五七五七七

番号	日本書紀歌謡
	(ハ) 五七五六七
三八	(イ) 同上
	(ロ) 道の後　こはだ嬢子　争はず　寝しくをしぞ　愛しみ思（も）／ふ／
	(ハ) 五六五六七
三九	(イ) 同上
	(ロ) 白樫の生に…／醸める大御酒
	(ハ) 同上
四二	(イ) 同上
	(ロ) ちはや人　宇治の渡りに…／
	(ハ) 同上

番号	古事記歌謡	番号	日本書紀歌謡
51	(イ) 宇治の稚郎子 (ロ) ちはや人　宇治の渡りに　渡り瀬に…苛なけく　そこに思ひ出　愛しけく　ここに思ひ出 (ハ) 五七五三八五七五七四七四七五七五七七八	四三	(イ) 同上 (ロ) ちはや人　宇治の渡りに　渡り手に…苛なけく　そこに思ひ　愛しけく　ここに思ひ… (ハ) 五七五三八五七五七四七四七五六五六七八
57	(イ) 磐之姫皇后 (ロ) つぎねふや　山城川を…川の辺に　生ひ立てる　烏草樹を　烏草樹の木　其が下に　生ひ立てる　葉広　斎つ真椿　其が花の　照り坐し　其が葉の　広り坐すは　大君ろかも (ハ) 五七五六五五四五五五三六五五四七七	五三	(イ) 同上 (ロ) つぎねふ　山城川を…川隈に　立ち栄ゆる　百足らず　八十葉の木は　大君ろかも (ハ) 四七五六五六五六七
58	(イ) 磐之姫皇后 (ロ) つぎねふや… (ハ) 五七五六五六三六二七八七	五四	(イ) 同上 (ロ) つぎねふ… (ハ) 四七五六五六三六二七八七

番号	古事記歌謡	番号	日本書紀歌謡
59	(イ) 仁徳天皇	五一	(イ) 同上
	(ロ) 山城に　い及け鳥山　い及けい及け　吾が愛し妻に　い及き会はむかも		(ロ) 山城に　い及け鳥山　い及け及け　吾が思ふ妻に　い及き会はむかも
	(ハ) 五七六七八		(ハ) 五七五七八
61	(イ) 仁徳天皇	五八	(イ) 同上
	(ロ) つぎねふ　山城女の…		(ロ) 同上
	(ハ) 四六五六四		(ハ) 同上
62	(イ) 口比売（口子の臣の妹）	五五	(イ) 国依媛（口持の臣の妹）
	(ロ) 山城の　筒城の宮に　物申す　吾が兄の君は　涙ぐましも		(ロ) 山城の…我が兄を見れば…
	(ハ) 五七五七七		(ハ) 同上
63	(イ) 仁徳天皇	五七	(イ) 同上
	(ロ) つぎねふ　山城女の…		(ロ) 同上
	(ハ) 四六五六五七五六七		(ハ) 同上

番号	古事記歌謡	番号	日本書紀歌謡
66	(イ) 仁徳天皇	五九	(イ) 機織女
	(ロ) 女鳥の　わが王の　織ろす服　誰が料ろかも		(ロ) ひさかたの　天金機　雌鳥が　織る金機　隼別の　御襲が料
	(ハ) 四七五七		(ハ) 五六四六七六
67	(イ) 女鳥の王		
	(ロ) 高行くや　速総別の　御襲が料		
	(ハ) 五七六		
68	(イ) 女鳥の王	六十	(イ) 舎人等
	(ロ) 雲雀は　天に翔る　高行くや　速総別　鷦鷯捕らさね		(ロ) 隼は　天に上り　飛び翔り　斉槻が上の　鷦鷯捕らさね
	(ハ) 四六五六七		(ハ) 五六五七七
70	(イ) 速総別の王	六一	(イ) 同上
	(ロ) 梯立の　倉梯山は　嶮しけど　妹と登れば　嶮しくもあらず		(ロ) 梯立の　嶮しき山も　我妹子と　二人越ゆれば　安席かも
	(ハ) 五七五七八		(ハ) 五七五七七

番号	古事記歌謡
71	(イ) 仁徳天皇
	(ロ) たまきはる　内の朝臣　汝こそは　世の長人　そらみつ 大和の国に　雁卵産と聞くや
	(ハ) 五五四六四七八
72	(イ) 建内の宿祢
	(ロ) 高光る　日の御子　諾しこそ　問ひ給へ 真こそに　問ひ給へ　吾こそは　世の長人　そらみつ 大和の国に　雁卵産と　いまだ聞かず
	(ハ) 五四五五四五五六四七五六
74	(イ) 不明
	(ロ) 枯野を…
	(ハ) 四五五六五五八四五四

番号	日本書紀歌謡
六一	(イ) 同上
	(ロ) たまきはる　内の朝臣　汝こそは　世の遠人 汝こそは　国の長人　秋津島　大和の国に　雁卵産と 汝は聞かすや
	(ハ) 五五四六四七五七五六
六三	(イ) 同上
	(ロ) やすみしし　我が大王は　諾な諾な　我を問はすな　秋 津島　大和の国に　雁卵産と　我は聞かず
	(ハ) 五七六七五七五六
四一	(イ) 応神天皇
	(ロ) 同上
	(ハ) 同上

番号	古事記歌謡	番号	日本書紀歌謡
77	(イ) 履中天皇	六四	(イ) 同上
	(ロ) 大坂に…		(ロ) 同上
	(ハ) 五七五七七		(ハ) 同上
78	(イ) 木梨軽の太子	六九	(イ) 同上
	(ロ) あしひきの　山田を作り…下問ひに　我が問う妹を　下泣きに　我が泣く妻を　今夜こそは…		(ロ) あしひきの　山田を作り…下泣きに　わが泣く妻　片泣きに　我が泣く妻　今夜こそ…
	(ハ) 五七五七五七五七五七		(ハ) 五七五七五六五六四七
81	(イ) 大前小前の宿祢	七二	(イ) 穴穂の皇子（安康天皇）
	(ロ) 大前　小前宿祢が…かく寄り来ね		(ロ) 大前…かく立ち寄らね…
	(ハ) 四七五六七		(ハ) 四七五七七
82	(イ) 大前小前の宿祢	七三	(イ) 同上
	(ロ) 宮人の…		(ロ) 同上
	(ハ) 五七五七七		(ハ) 同上

番号	古事記歌謡	番号	日本書紀歌謡
83	(イ) 木梨軽の太子	七一	(イ) 同上
	(ロ) 天飛む　軽の嬢子　いた泣かば　人知りぬべし…		(ロ) 天飛む　軽嬢子　いた泣かば　人知りぬべみ…
	(ハ) 四六五七六三七		(ハ) 四五五七六三七
86	(イ) 木梨軽の太子	七十	(イ) 同上
	(ロ) 大君を　島に放らば…我が妻はゆめ		(ロ) 大君を　島に放り…我が妻をゆめ
	(ハ) 五七五七七五七七		(ハ) 五六五七七五七七
97	(イ) 雄略天皇	七五	(イ) 同上
	(ロ) み吉野の　小牟漏が嶽に　獣伏すと　誰そ　大前に申す やすみしし　我が大君の　獣待つと　呉床にいまし 白妙の　袖着備ふ　手胼に　虻掻き着　その虻を　蜻蛉 早咋ひ　かくの如　名に負はむと　そらみつ　大和の国 を　蜻蛉島とふ		(ロ) 大和の　小武羅が嶽に　獣伏すと　誰か　この事　大前 に申す（一本、大前に申すを大君に申すに易へたり）大君は　其こを聞かして 玉纏の　呉床に立たし（一本、立たしをいま倭文纏の　呉 床に立たし）　獣待つと　我がいませば　さ猪待つと　我 が立たせば　手胼に　虻掻き着き　その虻を　蜻蛉早咋 ひ　這ふ虫も　大君に奉らふ　汝が形は　置かむ　蜻蛉
	(ハ) 五七五三八五七五七五六五六五七五六四七七		

番号	古事記歌謡	番号	日本書紀歌謡
			(ハ) 島大和（一本、這ふ虫を以下を、斯くのごと名に負はむとそらみつ大和の国を蜻蛉島といふに易へたり） 四七五七八五七五七五七五六五六五六五七七五九五三八
98	(イ) 雄略天皇	七六	(イ) 舎人
	(ロ) やすみしし　我が大君の　遊ばししし　猪の　病猪の　吼き恐み　我が逃げ登りし　在峰の　榛の木の枝		(ロ) やすみしし　我が大君の　遊ばししし　猪の　吼き恐み　我が逃げ登りし　在峰の　上の　榛が枝　あせを
	(ハ) 五七五三五七八四七		(ハ) 五七五三七八七五三
108	(イ) 顕宗天皇	八七	(イ) 武烈天皇
	(ロ) 潮瀬の…		(ロ) 同上（但し末尾に「一本潮瀬を水門に易へたり」がある。）
	(ハ) 四七五七七		(ハ) 同上
111	(イ) 顕宗天皇	八五	(イ) 同上
	(ロ) 浅茅原　小谷を過ぎて　百伝ふ　鐸ゆらくも　置目来らしも		(ロ) 浅茅原　小确を過ぎ　百伝ふ　鐸ゆらくもよ　置目来らしも
	(ハ) 五七五六七		(ハ) 五六五七七

番号	古事記歌謡	番号	日本書紀歌謡
112	(イ) 顕宗天皇	八六	(イ) 同上
	(ロ) 置目もや…		(ロ) 同上
	(ハ) 五七五七八		(ハ) 同上

(五二)、83 (七一)、86 (七十)

(ハ) 三音もしくは一句のもの三組。8 (五)、62 (五五)、81 (七二)

(二) 右の(イ)(ロ)(ハ)以外の微細なもの一組。111 (八五)

(3) 作者だけが違うもの二組。74 (四一)、108 (八七)

以上の(1)(2)(3)は、類同歌ではなく、同歌と近似歌と呼ぶべきものであろうが、それはともかく、違っていても極めて微細であるだけに、資料的な同一性が考えられるのであるが、視点を換えて見れば、敢えて違わせた側面もあるのではないかの疑いを強くするのである。

なお、右の比較に、用字、用字意識などを考慮に入れなかったのは、勿論稿者の菲才によるが、富山民蔵著『語構成から見た日本書紀・古事記の語・語彙の比較研究上・下』(風間書房) の大著があり、そこでは、(下巻1130頁)

上記の記紀の二歌謡について、詞章構成の過程における用字意識を考えるに、仁徳記の (62) の歌謡は、仁徳紀の類歌 (55) の歌謡を基にして、歌格の整理をして、各語彙の訓讀を示した譯歌

三

以上、繁を厭わず、一般に類同歌と呼ばれるものを、作者、歌詞、形式の上から比較し、表にしたものであるが、最初にその表(二)を更にまとめて差異の無いか、僅少なものを三つに整理してみたい。

(1) 作者、歌詞、形式が完全に同じ歌謡 (完全一致歌) は八組。25 (二五)、26 (二六)、41 (三四)、61 (五八)、63 (五七)、77 (六四)、82 (七三)、112 (八六)。(74と四一は、74番歌が、『古事記』としては珍しく、作者を明らかにしていないのでこの中に入れない)

(2) 歌詞の違いが

(イ) 一音もしくは一語のもの十組。1 (一)、12 (十四)、14 (十二)、23 (二十)、32 (二一)、40 (三三)、45 (三七)、48 (三九)、50 (四二)、58 (五四)

(ロ) 二音もしくは二語のもの五組。46 (三八)、51 (四三)、59

と考えられはしないか。

などに示される、大胆な説が展開されているので、今軽々にその方面に言及しないのが適当と考えたからでもある。

(1)の完全一致歌を順次検討して行くことにする。25（二五）、26（二六）の二組は、後世連歌の起源とされた片歌の問答歌で、連歌のことを「筑波の道」と言ったり、連歌書に『菟玖波集』などとあるのも、ここから来ている有名な歌である。作者の倭建命は記紀両書でその像が大きく違っているのに、この二組四首の歌に関しては全く同形であるが、それは、片歌という短詩形であることが大きく働いていると思われる。

他の完全一致歌の六組までが短歌形式で、61（五八）、63（五七）の二組も八句体、九句体小長歌であることからも、当然のことながら、短詩形の歌謡であることが、変化せずに伝誦される要素の有力な一つであることが確認される。

41（三四）は、「…を見れば…も見ゆ…も見ゆ」の寿歌的歌詞を含む、典型的な「国見歌」即ち国土礼讃歌である。短歌形式の上に、国見歌の定形的表現を持つことから記紀で完全に同じ形となった。

61（五八）、63（五七）は、仁徳天皇に対する石之日売皇后の嫉妬物語中の歌謡で、初句から第四句までが序で、後段の本旨を導くものである。63歌の後に「この天皇と大后の歌はしし六歌は、志都歌の歌返なり」とあるように、宮廷歌曲として歌い継がれたものであった。この「石之日売物語」ともいうべき長い物語が広く知られていたことは、記紀の中でも有数の長編物語であることや、『万葉集』巻二の巻頭にもそれの面影を十分に見ることが出来ることなどから容易に想像できる。特にこの二組の歌は、仁徳天皇が石之日売を自身で説得する重要な歌であるし、序の部分「つぎねふ　山城女の　木鍬持ち　打ちし大根」は特異で動かしがたい詞句であるから、記紀で完全に一致したものと思われる。

77（六四）は、履中天皇に対する「墨江中王の反乱物語」の中の歌である。この物語は、記紀で殆んど差がなく語られていて、歌謡は『古事記』三首に対し『日本書紀』は六四の一首で、その一首が完全に一致している。『古事記』の他の歌謡の出自については、山路平四郎著『記紀歌謡評釈』が78（大系本では77に相当する）の〔評〕の部分で、

ただ墨江中王の反乱物語は、『記紀』の間で殆ど相違がないのに『書紀』の伝える歌謡は、『古事記』の三首のうち、これと同歌である〈六四歌〉だけである。したがって、この歌と前二歌とは、本来出自を異にするものではなかろうか、と思われる点だけを付記しておく。

とあるのが当を得ていると思う。とすれば、この77（六四）が最も重要な歌となるわけで、待伏せを教えて履中天皇を救った「一女人」は神霊の宿る人で、神意が乙女によって示された神聖な話が歌謡によって解き明かされているのである。それだけに、記紀で異なる余地がなかったのではないだろうか。

82（七三）は、『古事記』によれば木梨之軽太子が美しい同母妹と関係して身を亡ぼす、近親相姦と皇位継承が絡んだ、多数の歌謡（記で十二首、紀で五首）を含む「木軽之軽太子の物語」中の一首である。『日本書紀』の本文では、允恭天皇崩去の後、人心が自分

から離れた軽太子は、穴穂皇子を攻めるが、時に利あらず、逃げ込んだ大前宿祢の家で死んだ、となっている。これに対し、『古事記』では、大前小前祢宿は、太子を捕えて穴穂皇子に貢進り、太子は伊予の湯に流されたことになっている。ただ、『日本書紀』の分注に「一に云はく、伊予国に流しまつるといふ」とあり、これは記の内容と一致する。この歌は『古事記』では、「宮人振」の歌曲名が付されており、その歌曲名も「宮人の　足結の小鈴　落ちにきと…」の初句から来たことが確信されるのであるから、宮中に伝承される（もとはともかく）歌謡であるし、記紀に異同がないのも当然な歌である。

112（八六）は、112歌が『古事記』最後の歌謡で、雄略天皇に殺された顕宗天皇の父、市辺の王の御骨が埋まっている所を知っていた淡海の老媼（置目老媼）が、老齢を理由に淡海の国に帰る時、顕宗天皇が見送りながら歌われたものである。記では単に「見送りて歌ひたまひき」とある歌の前文が、紀では「天皇、聞こしめし惋痛みたまひて、物千段を賜ひ、逆め路を岐れむことを傷みて、重ねて期ひ難きことを感きたまふ」とあって、歌とともに老媼を思う気持が溢れている。この物語に出てくる二組の記紀類同歌は極めてよく似ているし、物語自体も大筋では変わらない。『古代歌謡全注釈日本書紀編　土橋寛』は、八六歌の考説の所で、記紀の伝承の相違点から、

『紀』のほうは倭俗の系統の伝承、『記』のほうは韓俗の系統の伝承と考えられ、両者の対立関係がかなり明確に伝承に反映している点がおもしろい。

と述べているが、『古事記』最後の歌謡が『日本書紀』と完全に一致するのは、資料的な確実性を両書が尊重した結果かもしれない。

以上、完全一致歌八組について概観したところによれば、著名な（広く知られた）物語挿入歌である、序や寿歌的詞章などの定型的表現がある、短詩形で、（せいぜい十句以下）短歌形式が多い、などにまとめられる。当然と言えば当然であるが、そのことを確認したうえで、次の(2)について考えるのであるが、その前に(3)の作者だけが記紀で異なる二組について簡単に観ておきたい。

74（四一）で特徴的なことは、先にも言ったように『古事記』に作者が明記されていないことを含めて、記紀で話の内容がかなり違うことである。そこには伝承者の違いがあったとする『古代歌謡古事記編　土橋寛』の説が妥当であろうが、記に「此は志都歌の歌返なり」とあるように、宮廷で歌われた歌謡であることが確かである。四五五六五五八四五四という、不整形十句の小長歌が記紀で完全に一致するというのは、楽府（後の雅楽寮）において演奏されたからである。

108（八七）は、『古事記』では、歌垣に立って、大魚という美人を争った、袁祁の命（顕宗天皇）と志毘臣の歌謡物語で六首の歌謡と僅かな地の文でまとめられている。一方『日本書紀』では、太子（武烈天皇）と鮪が影媛を争って歌場に立つ歌謡物語で、やはり八首の歌と僅かな地の文から成り立っている。話の内容は殆んど同じなのに、右の合計十四首の歌のうち、類同歌と呼ぶべきものは、この一組だけで、他は全く違う歌から出来ている不思議な物語である。これについては前掲『記紀歌謡評釈』（24頁）が、

何にしても、記紀両書のシビ物語が、その骨格を同じくしながら、共通の歌謡が、ただ〈108〉歌だけであるのは、あえて両者が互に異を立てようとしたことを端的に物語るものだろう。

と指摘する通りであろう。とした場合、この一組の完全一致は、どう考えるべきであろうか。俄かに結論は出せないが、『日本書紀』のようにこの八七歌が最初に来る伝承が正しかったのではないか。

『古事記伝』も、

此は伝への間に、歌の次第の乱れたるにて、書紀に、太子の、之哀世能云々の御歌を、先此に挙げられたるぞ正しかりける。

と、この歌が最初に置かれるべきであることを主張している。もしこの想像が正しければ、「鮪」という名前を含み、「…見れば…見ゆ」の定型的表現を含む、短歌形式の歌が、基本となり話が展開する以上、記紀両書で、この歌謡は変化しにくかったのである。

以上、当初考えた、記紀歌謡の中の「類同歌を通して記紀の関係を観たい」のうち、同歌だけを対象にして紙幅が尽きてしまった。次稿で、(2)の僅少差異歌を考え、更に他の類歌についても考察を広げて、『日本書紀』の「対古事記意識」を明らかにしたいと思う。